

---

# 嘘つきの娘

金本ちはや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嘘つきの娘

### 【Nコード】

N3337B

### 【作者名】

金本ちはや

### 【あらすじ】

夕闇に染まる逢魔ヶ時、花澄はひとり、稲荷神社の境内にいた。家に帰りたい。けれど帰れない。なぜなら、どうしても会いたくない人が待っているから……。そんな花澄の前に、ひとりの男が現れて。

## 1 帰りたくても帰れない

ふと足元から伸びる影が長くなったような気がして、花澄は空を見上げた。<sup>かすみ</sup>

この季節特有の褪せたように青い空は、いつの間にかやわらかな茜色に変わっていた。街を照らす斜陽は秋の頃に比べ、淡く優しいふんわりと浮かぶ千切れ雲が桜の花びらのように色づいていた。

もうすぐあたりは闇に包まれる。そろそろ帰らないと母が心配するだろう。ただでさえ最近物騒な事件が多く、寄り道をしないように言われているのだから。

けれど……。

再び視線を足元に落とすと、花澄はため息をついた。靴の底で地面を蹴ってブランコを漕ぐ。錆びついた鎖が微かに軋んだ。

花澄がいるのは、通学路の途中にある稲荷神社だった。境内の隅にブランコや滑り台などの遊具が置いてあり、ちょっとした公園のようなスペースが設けられている。社殿の裏には鎮守の杜がこんもりと繁っていて、夏になると虫取り網を持った子どもたちがやってくる。

花澄もよく幼なじみの男の子に虫取りにつき合わされた。花澄としては、なかなか捕まらない虫を追いかけて汗だくになるよりも、他の女の子と一緒に社殿の簀子に腰かけ、アイスクャンディを食べながらおしゃべりに興じていたほうが何倍も楽しかったのだが。

中学生となった今では、男の子と遊ぶことはとんとなない。あんなに仲が良かった幼なじみでさえ、お互いに声をかけなくなった。小学校までは一緒だった登下校も別々だし、休み時間に廊下ですれ違ってもちらりと一瞥するだけだ。

どうして急に疎遠になったのか。当事者である花澄にもわからない。なんとなく、気がついたらそうになっていた。自覚してからも元に戻ろうとは思わない。別に仲良くしてはいけないわけではないの

だが、なんだか以前のように振舞うことがためらわれるのだ。

よそよそしくなった子どもたちを見て、母親たちは特に何も言わなかった。ただ、困ったような、呆れたような苦笑をこぼしただけだ。もしかしたら彼女たちは原因が分かっているのかもしれない。

ざあつと風に木々がざわめいた。ハツと顔を上げると、残照は消え、境内は薄暗い水色に染まっていた。頂に触れる空気の温度が唐突に下がりはじめた気がした。

夜が来る。

朱塗りの剥げた鳥居の向こうで、街灯に明かりが点いた。神社を囲む家々の窓からもあたたかな光がこぼれている。どこの家でも夕食の支度に追われている頃だろう。空腹とともに心細さがこみ上げてきて、花澄は思わず泣きそうになった。

帰りたい。

でも、帰りたくない。家に帰れば、母と『彼』が待っているのだ。

会いたくない。

だから帰りたくない。帰れない。

風が強くなっていく。木々のざわめきはひと際大きくなり、杜の黒い影が踊り狂う怪物のように揺れている。鎖を固く握りしめ、花澄は藍色に深まっていく空を見上げた。

チカチカと瞬く一番星が、遠い。

朝からやたらとそわそわしていた母を思い出す。表情や口調、仕種が、母の胸は喜びでいっぱいなのだと物語っていた。

あの星と母は同じだ。花澄を置いてけぼりにして、ずっと先に行ってしまう。『彼』の待つ遙か遠くに。

花澄はまだそこへたどり着けない。最初の一步を踏み出すことさえできていない。

このまま、永遠に追いつけないのではないだろうか。スタートラインに立ち竦んだまま、小さくなっていくふたりの背を見送るしかないのではないだろうか。

ずっと、ここに、ひとりぼっち。

「こんなところで、何してるんだい」  
不意に。

風の唸り声も木々のざわめきも切り裂いて、低い男の声が響いた。  
驚いて振り返ると、ブランコから少し離れたところに背の高い人  
影が立っていた。

まるで地に落ちる影のなかから現れたように、黒々と、まっすぐ  
に。

## 2 狐面の男

風がやんだ。

人影の纏う黒いコートの裾が大きく翻り、元の位置に戻る。木々のざわめく声も消え、ふたりの頭上にはらはらと枯れ葉が降り注いだ。

花澄は茫然と人影を見つめた。

すらりとしていて痩せている。といってもなよなよとした印象は受けず、無駄なく引きしまったという感じだ。姿勢がいいから余計そう思うのかもしれない。

「女の子がひとりで出歩くような時間帯じゃないだろう」

人影は足音を立てず、すっと近づいてきた。空いていた隣のブランコに軽い動作で腰を下ろす。

「早くお帰り。まだ完全に暗くなっていないから、街灯を頼りに走っていけば大丈夫だ」

そう言うのとコートの内側に手を突っこみ、何かを取り出した。煙草の箱とライター。煙草を箱から引き出して口にくわえると、両手で口元を覆うようにして火を点けた。

シュツと小さな音がして、ライターの火がやや俯いた横顔を照らす。

狐。

一瞬、そう思った。顎の尖った細面。少し伏せられた目はナイフで入れた切れこみのように細く、目尻が吊り上がっている。無表情のはずなのに、皮肉げに微笑んでいるような薄い唇。まるで狐の面のような造作だった。

「おじさん……だれ？」

ライターの火が消えても、男の顔ははっきりと目に焼きついていった。その残影と目の前の人影を重ね合わせながら、花澄は尋ねた。

男は紫煙を吐き出し、小さく苦笑した。

「おじさん、ね」

花澄は目を瞬かせた。男は三十代前半、ちょうど母と同年代に見えた。だから『おじさん』という呼称を使ったのだが。

「そうか、俺もそう呼ばれる年齢か」

「……お兄さん、のほうがよかった？」

「いや、別にいいよ」

男は煙草を持つほうとは別の手を上げ、ひらひらと横に振った。

「それより」

暗がり越しでも視線を感じる。隣に人がいるということに、花澄は安堵を覚えた。

ひとりでは、ない。

「いつまでもこんなところにいないで、おうちにお帰り。いくら住宅地のなかにあるからって、夜になったら危険だよ」

低い、するりと耳に入ってくる声。思わず聞き惚れるというのは、こういう声を言うのだろうか。

特に口調がやわらかいわけでもないのに、響きが優しい。固く強張った心をたちまち解きほぐしてしまう声だ。

「……おじさん、もしかして変質者？」

「は？」

「最近、このあたりでよく出るんだって。日が暮れてから、ひとりで歩いてる女の子に声かけて、お尻とか胸を触るんだよ」

もしも不安な夜道でこんな声にささやかれたら、どんな女でも油断してしまうかもしれない。変質者というと、いかにもあやしいオヤジを想像するが、彼は格好いいオジサマだ。声と外見を利用して、何人でもか弱い乙女を餌食にできるだろう。

「……あのね」

しばし沈黙していた男は、笑っているような唸っているような、妙な声を洩らした。何か言いたげに花澄を見つめていたが、やがて脱力したように項垂れると、長く重いため息をついた。

「本当にそっくりだな……」

「え？」

「なんでもないよ。……じゃあ、俺がその変質者だったらどうするんだい？」

花澄は唇を引き結んだ。ふいつと男から目を逸らし、視線を地面に落とす。

「別に、おじさんが変質者でもかまわないよ。このままどっかに連れていかれちゃっても、いい」

「……どうして？」

男の声が一段低くなった。細い目がずっと細まり、針のようになつた気がした。何もかも見透かしているまなざしで花澄を見つめているような。

もしかしたら彼は人間ではないのかもしれない。この神社に祀られているお稲荷様の使いだという狐が、ひとりぼっちの子どもを哀れんで、人の姿を取って現れたのかもしれない。

それでもいいと思った。だれかがそばにいてくれるなら。『彼』に会わずに済むのなら。

「家に帰りたくないの」

おかえり、という母の声。あたたかな夕食。テレビを見ながら交わされる、他愛もないおしゃべり。

いつもと変わらぬはずのそこにひとり、異質な者がいる。

花澄にとって、『彼』は母と築いてきた日常を壊す破壊者でしかない。

受け入れてしまえば、もう二度と戻れなくなるとわかっている。

だから、怖い。会いたくない。家に帰れない。

「……今日、帰ってくるの。わたしの『お父さん』が」

顔も声も知らない。会ったことさえない。

まるで世界を覆っていく闇のように、その姿なき存在は、花澄の心を冷たく震わせた。



### 3 昔語り(1)

花澄の父は、結婚詐欺師だったらしい。

母が言うには、「そんじょそこらの俳優がなんて目じゃない」ほど格好よくて、「紳士という言葉は彼のためにある」ほど優しくかったそうだ。

最初、それは母を騙すための演技だったわけだが　やがて、真実のものへと変わっていった。

いつしか父は、母を本当に愛するようになっていたのだ。

父は母にすべてを打ち明けた。分は結婚詐欺師で、金目的で資産家の令嬢だった母に近づいたということ。母は驚いたが……父に別れを告げることは、なかった。

一度だけ、なぜ別れなかったのかと訊いたことがある。すると母は微笑んで、こう答えた。

「愛していたからよ」

騙されていたのだと知って悲しくないはずなんてないのに、怒りを覚えないわけなんてないのに。それでも母は、父と一緒にいることを望んだ。胎の中に宿った父の子を産もうと決めた。

母の家族は猛反対したという。

どんなに説得しても耳を貸さなかったそうだ。だから、父と母は手に手を取って駆け落ちした。

すべてを捨てて、母は父を　そして、花澄を選んだのだ。

「いろんなところを転々としたって言ってた。せめてわたしが生まれるまでに、完全に行方をわからないようにしたかったんだって」

唇を動かすたびに白い息がこぼれ、もわっと広がり、霧散する。

視線を上にとやると、暗い空に白い三日月が引っかかっていた。ガラ

スを細かく砕いて撒いたような星の光は微かで、弱々しい。

男は黙って煙草を吸い続けていた。もう何本目だろう。吸い殻は男の足元に溜まり、山のようになっているに違いない。

「それで結局、この町に落ち着いたんだって。暮らしはじめたアパートの、隣の部屋のご夫婦が同じ年頃で、同じように赤ちゃんがいて、とってもいい人たちで、すぐに仲良くなったって」

それが幼なじみの両親だ。彼らは花澄の両親の事情を知っているようだった。母ひとり子ひとりの暮らしを、親身になって助けてくれた。

「それから、わたしが生まれたの。わたしの名前、花澄っていうんだけど……お父さんがつけたんだって」

花のようにかわいらしい、心の澄んだ女の子になってほしい。そんな願いがこめられているのだと、母に教えてもらった。

「……その名前、気に入ってるかい？」

男の問いに、花澄は小さく首を傾げた。

「……わかんない。でも、嫌いじゃない、と思う」

「そうか」

ふっと、男は微笑<sup>ちやう</sup>つた。なぜだろう、嬉しそうだ。

花澄がじつと凝視していると、今度は男が首を傾げた。

「なんだい？」

嬉しそうだね、と言おうとして……どうしてかためられた。花澄はごまかすように訊き返した。

「おじさん、変質者じゃないなら、黒狐？」

「……は？」

「だって顔、狐みたいだし。足音しなかったし、なんだか身軽そうだし。それに服が黒いし。ここのお稻荷様の使いの狐って、真っ黒な毛をしてるんだって。だから黒狐っていうんだよ」

男はしばしぽかんとしていたが、やがて嘆くように空を仰いだ。

「……変質者の次は神様の使いか」

恨めしそうな声に、花澄は慌てた。

「やっぱり変質者だった？」

「いや……うん、もうなんでもいいよ。きみの好きなように思ってくれ」

なんだか投げやりな返答だが、花澄はツツコまずにそうさせてもらうことにした。

「じゃあ キツネさん」

「……うん」

煙草をくわえ直しながら男が頷く。苦笑混じりの微笑を浮かべているのが見えずともわかるようだった。

なんだろう、この気持ちは。風が弱まったとはいえ、肌を刺すような寒さはかわらないのに。胸の奥からあたたかい熱が滲んでくる。知らず、花澄は男に笑い返していた。

### 3 昔語り(2)

花澄はブランコの上に立つと、板を蹴り上げるようにして勢いよく立ち漕ぎをはじめた。ガッシャンと鎖が大きく鳴った。

闇に染まった視界が前に後ろに大きく揺れる。風が耳元でくぐもった音を立て、冷気が肌を切るようだった。

「わたしが生まれてすぐ、お父さんが出ていったの」

揺れるたびにブランコは勢いを増していく。このまま飛び上がれば、あの星の許まで行けるだろうか。それとも、底なし沼のような闇に落ちていくのだろうか。

男は沈黙していた。

「お父さんには前科があつて、それを償いにいったんだつて。罪を償わない限り、わたしの父親を名乗る資格なんかないつて」

母はもちろん反対した。泣いてすがつて、言い争ってまで止めようとした。けれど、結局は折れてしまった。

何年かかっても必ず帰ってくるからという約束を残して、父は去った。

それから十三年。

「今日、帰ってくるの」

ブランコが、大きく前方に揺れた。      今だ。

充分ついた勢いを助力に、屈伸を発条にして、花澄はブランコから跳んだ。

ふっと全身を浮遊感が包んだ。夜空が、星の瞬きが、一瞬近くなる。

花澄はとつさに手を伸ばた。けれど指先は空を搔き、放り出された体はそのまま弧を描くように落下する。着地の体勢を取る間もなく、暗い闇の底、固い地面に向かって。

「！」

息を呑んだのは花澄か、それとも男だったのだろうか。

反射的に目を瞑った花澄を受け止めたのは、たくましい人の腕だった。

「うわっ！」

男は花澄を抱えたまま勢いに負けて倒れこみ、地面に転がった。彼にしっかりと抱きこまれていた花澄は、鈍い衝撃を受けただけだった。

「キツネさんっ」

花澄は思わず、悲鳴のような声を上げた。

男は「いたたた……」と呟きながら身を起こすと、コートの胸元にしがみついている花澄の顔を覗きこんだ。

「怪我はないかい？」

「……うん」

「それはよかった。でも、ああいう危ないことは感心しないな。もし俺が受け止めなかったら、頭から地面に突っこんでいたと思うよ？」

花澄の髪についた土を払いながら、男は諭すように言った。花澄は俯くと、小さく声を絞り出した。

「ごめんなさい……」

「わかってくれればいいんだ」

男がやわらかく笑った気配を感じて、花澄は男のコートをぎゅっと握りしめた。男の胸に額を押しつけるようにして、深く顔を埋める。

泣きたい。

今ここで、声の限り泣きじゃくってしまいたい。もう中学生になったからだとか、そんなことは忘れて、泣くことしか知らない赤ん坊のように、涙と一緒にこの胸に溜まった気持ちを吐き出してしまいたい。

この人なら。

彼なら、何も言わずに受け止めてくれるような気がした。肯定も否定もせず、ただ黙って聞いてくれるような気がした。

母にさえ打ち明けられなかった、この想いを。

「……どうしたんだい？」

男の手が、つと頭を撫でる。ほんのわずかにためらっているような手つきに、なぜか懐かしさがこみ上げてきた。

父も。

記憶にない父も、こんな風に頭を撫でてくれたのだろうか。  
おとうさん。

顔も声も、においもぬくもりも、何ひとつさえ知らぬその人に向かって、嗚咽に喉を震わせながら花澄は呼びかけた。

#### 4 本当のこと(1)

父は花澄を愛していたのだと、母は言う。花澄のために自ら厳しい場所へ赴いていったのだと。誇らしげな、悲しげな母の笑顔を、今でもはつきりと憶えている。

なんて自分勝手なのだろう。

花澄のためだなんて、そんなのは詭弁だ。母や花澄を置いていつまで罪を償ってほしいなんて、花澄は望んでいない。そんな愛情なんて求めていない。

父は知っているのか。母がどんなに苦労してきたのか。果たされる確証なんてない約束を抱え、どんなに不安だったか。

花澄が。

花澄が、どんなに。

気づくと、再び風が吹き荒れはじめていた。

男の胸から顔を離すと、冷たい空気が頬を叩き、涙の痕をさつと乾かしていった。花澄は涙をすすり上げると、熱を帯びた目元をこしこしとこすった。

「……ごめんなさい」

花澄が泣きじゃくっている間、男はずっと優しく抱きしめ、頭を撫でていてくれた。そのお陰でこみ上げきた感情を我慢せずに吐き出せたのだが、我に返ってみると気恥ずかしさと申し訳なさでいっぱい、顔を上げられなかった。

男は片腕の抱擁を解くと、花澄の頭に載せたままの片手を、後頭部の輪郭をたどるようにゆっくりと動かした。

「落ち着いたかい？」

尋ねてくる口調はやわらかなままだった。花澄がこくりと頷くと、

そうかと小さく微笑んだ気配がした。

どうして彼はこんなに優しいのだろう。

会ったばかりの花澄に、こんなにも優しくしてくれるのだろう。そうしなければならぬ義務などありはしないのに、どうして。

「……きみは」

ふと男が呟きを落とした。つられるように顔を上げると、暗がりの向こうから見つめてくる瞳を感じた。

「きみは、お父さんのことが……嫌いかい？」

風の音にさわられてしまいそうな、掠れたような問い。だが男の言葉ははつきりと花澄の耳の届き、鼓膜を、心を、震わせた。

男はもう一度、花澄の頭を撫でた。

「きみをそんなにも泣かせてしまうのは、お父さんの仕業だろう？」  
違うかい？ と訊いてくる声に、花澄はただ、意味もなく唇を動かすことしかできなかった。

違うと言えたら、どんなによかっただろう。

父なんて関係ない。花澄が気にかけているのは、心動かされるのは、いつだってこの世でたったひとり、母だけだと。

けれど、けれどそれは。

「嫌い、なんて……」

ぼろりと。

こぼれたのは、想いか、涙か。

きつと両方だ。

「そんなこと、思えるくらい……わたし、お父さんのこと……知らない」

けれど、それはただの屁理屈に過ぎない。

本当は、本当はいつも、ずっと叫んでいた。心の奥底の、深い深い場所で。

どうしてそばにいてくれないの。どうしてわたしを置いていくの。ねえ、お父さん。わたしを愛しているのなら、ねえ、どうか。

「知らないよ……っ」



どうか、そばにいてください。

花澄は両手で顔を覆った。背を丸めると、再び男に抱きしめられた。

そう。真実はとても単純で、だからこそ認めたくなかった。

さびしかった。

さびしくてさびしくて、父がそばにいないことが、置いていかれたことが、たまらなく悲しかった。

「わたしのために、つ、罪を償うくらいなら、普通に、一緒にいてほしかった。抱きしめたり、頭撫でたり、肩車したり、手をつないだり、い、いろんなこと、してほしかった……！」

コートの胸元にすがりつき、花澄はしゃくり上げた。風の唸り声も木々の叫びも遠くなり、己の身の内から溢れ出る思いだけが、渦巻くようにこだまする。

どんなに頭のなかを探しても、父の記憶は何ひとつない。真っ白な虚無を見るたび、思い出のない自分を確認するたびに、泣きたくなった。

もしかしたら、父は花澄を愛してなんていなかったのかもしれない。だから家を出ていってしまったのかもしれない。そんな恐怖を抱くようになったのは、いつからだろう。さびしさとおそろしさ、静かに膨れ上がっていく感情を母に打ち明けることは、どうしてもできなかった。

どんなに時が経とうと、父を信じて帰りを待ち続ける母の心を、裏切ってしまうような気がして。

「お、お父さんが帰ってくるって聞いて。わたし、怖かった。う、嬉しいんじゃないかって、怖かったの。お父さんに会って、どんな顔されるのか、どんなこと言われるのかって。もし、もしかしたら、嫌われてるんじゃないかって……」

「そんなこと」

体を包みこんでいる腕にぎゅっと力がこもる。男が声を押し出すように、苦しげに言った。

「そんなこと、あるわけないじゃないか」

情けない自分の嗚咽の向こうから聞こえてきた言葉に、花澄は口をつぐんだ。薄闇の奥を探るように、男の顔を見上げる。

男はそっと、花澄の濡れた頬を指先で拭った。

「そんなこと、あるはずがない」

男の声は、ひどく苦渋に満ちていた。両頬の涙を拭い取ると、彼の指は顔から離れていった。

「……キツネさん？」

呼びかけると、やわらかく後頭部を押さえるようにして抱き寄せられた。すっかりなじんだ抱擁の感覚のなか、彼は「違うよ」と呟いた。

「違うよ。俺はそんな尊いものじゃない。きみを泣かせてしまうよ  
うな……嘘つきだ」

花澄、と。

まるで凪いだ水面に波紋を生む一滴のように、小さな小さなその声は、だが確かに、音を立てて花澄の心を叩いた。

#### 4 本当のこと(2)

時が止まったような気がした。

花澄は目を睜ったまま、男の腕のなかで凍りついた。あらゆるものが遠ざかり、自分を包みこむ男のぬくもりだけが熱い。

どれほど固まっていただろうか。一分か五分か、あるいは一秒にも満たない数瞬か。

やがて、音が、色が戻り、髪を弄ぶ風の冷たさを耳朶に感じた。

花澄はゆっくりと瞬くと、茫然と、いつそ間抜けな声を洩らした。

「……………え？」

顔を上げ、まじまじと男を見つめる。

「さっきの……………どういう意味？」

男は花澄の視線から逃げるように顔を逸らした。

応えはない。

「ねえ」

花澄は男の腕を掴み、小さく揺すった。こちらを見ようとしない細い目に、閉じたままの唇に、微かな苛立ちを覚える。

「キツネさん！」

思わず声を荒げると、男はようやく振り向いた。

そして小さな、本当に小さな声で、ひと言。

「……………そういう意味だよ」

花澄は動きを止めた。

穴が空くほど男の顔を凝視する。頭のなかが真っ白になり、そして一気に感情が爆発した。

「……………っ！」

言葉にならないとはこのことだ。喉の奥どころか舌先にまでぶつけてやりたい文句が溢れてくるのに、許容範囲をオーバーし、口を開けた途端に散じてしまう。

花澄は口をぱくつかせていたが、ようやく上擦った声を絞り出し

た。

「な、なんで言ってくれなかったの？」

コートの胸元を掴んで睨みつける。ぐっと眉間に力をこめていないと、また泣いてしまいそうだった。

男は一瞬沈黙し、静かな口調で答えた。

「きみと同じさ。父親だと名乗って、きみがどんな顔をするのか……怖かった」

後頭部に添えられていた手が頬へと動き、目尻に残っていた涙を指先でそつと拭われる。

「いつまでも帰ってこないきみに、もしかしたらと思っていた。ブランドコにぼつんと座っていたきみを見つけたとき、確信したよ。……花澄は、俺に会いたくないんだなって」

男は、どこかさびしげな微笑をこぼした。

「だから、名乗らずにどこかへ行ってしまうおうと思った。でも、一度でいいから、きみと話がしたかった」

ごめんな、と続いた言葉に、花澄はきゅっと唇を噛んだ。

体が震える。皺が寄るのもかまわず、更に強くコートを握りしめた。

本当に、どうしようもないくらい、自分勝手な男だ。

花澄は生まれてはじめて、だれかをぶん殴ってやりたいと思った。

「……いで」

沸き上がってくるのは、目がくらむような激しい怒り。

「ふっ、ざけないで！」

今までの人生でこれ以上ないというほどの大音声で、花澄は怒鳴った。

「十三年も放ったらかしといたくせに、帰ってきたらまた置いてこうとするなんて、ふざけないで！ お母さんがどんなに待ってたかわかってるの！？ ずっとずっと、いつ帰ってくるかもわからないお父さんを馬鹿みたいに信じて……っ！」

母の笑顔が脳裏にちらついた。だれよりもそばにいる花澄が、手

の届かない星のように感じてしまっただけ、いつそ愚かしいまでの一途さで父を愛しているのに。

「わたしだって、怖かったよ！ お父さんに会って、本当の気持ちを知るくらいなら、お母さんとふたりっきりのままでいいって思った！ でもっ、それでもっ、ずっとさびしくて、ずっとそばにいてほしくて……だからお父さんが帰ってくるって、会えるって知って……怖かった、けど 嬉しかったもん！」

不安やおそれの底に確かに存在した、再会への喜び。

スタート地点で立ち竦んでいたのは、一步を踏み出すことができなかったのは、ただ、勇気がなかったから。

父の口から語られる真実を知り、受け入れる勇気がなかったから。けれど。

「わたしはお父さんのこと、何も知らない。思い出なんかない。真っ白で、なんにもないの。ねえ、でもそれって、新しくはじめられるってことでしょ？ なんにもない空白を埋められるってことでしょ？」

けれど今は、父と向き合いたい。離れていた十三年分の時間を、一緒に取り戻していきたい。

もう置いていかれるのはいやだ。離れ離れだなんてごめん。

「だから、もうどこかへ行くなんて言わないで。お母さんを悲しませないで。わたしを、さびくさせないで」

体のそれが伝わったように、声が震えた。知らず滲み出した涙が目縁から溢れ、男の指先を濡らしていく。

しゃくり上げそうになりながら、一番告げたいことを、言った。「そばに、いて」

とうとう堪えきれず、花澄は再び嗚咽をこぼした。渦を巻いていた怒りはいつの間にか、どうしようもない慕わしさに変わっていた。傍から見れば、きつと駄々をこねる子どものようにみつもないだろう。だが、どんなに滑稽だったとしても、光にさらされた自分の真の思いに目を瞑ることはできなかった。

コートの胸元に額を押しつけて泣く花澄の肩に、ためらいがちに男の手が触れた。少々ぎこちない動作で抱きしめてくる。

「……いいのかな」

涙を拭ってくれた指先が、優しく髪を梳いた。

「俺は、きみに『お父さん』と呼んでもらえるような、きみの父親だと名乗るに足りる人間なんだろうか」

花澄はこのとき、はじめて理解した。

自分が愛されていることを。彼が彼なりのやり方で、娘を愛していてくれたことを。

正しかったのか間違っていたのか、花澄にはわからない。しかし、ずいぶんな遠回りの果てに、ようやくはじまりにたどり着いたような気がした。

スタートラインを越えるときは、きつと今だ。

花澄はぐすりと鼻を鳴らして顔を上げた。火傷をしたような瞼をこすり、目の前の男を　父を見つめる。

そして微笑んだ。のちに、彼が母にそっくりだと言う笑顔で。

「今も昔も、これからも、わたしのお父さんはお父さんだけだよ」

## 5 嘘つきな父とその娘

「帰ったら、お母さんに謝らないとな」

隣を歩く父がふと言った。

花澄は父を見上げた。こうして並んでみると、やはり父は大きな人だった。狐によく似た目はずいぶん高い位置にある。

アパートへの帰り道。あたりに花澄と父以外の人影はなく、ふたりの足音がやけに大きく響く。ぽつぽつと立つ街灯がさびしげにアスファルトを照らしていた。

「お母さん、怒ってた？」

すっかり遅くなってしまった。今日の夕飯はご馳走にすると考えていたのに、きつと冷めてしまっているだろう。

「いいや」

しかし父は苦笑すると、小さく首を横に振った。

「心配していたよ、とても」

その言葉が、遅すぎる帰宅だけを示しているのではないことに、花澄は気づいた。

母はわかっていたのかもしれない。何も言わない娘が、父に対してどんな思いを抱いていたのかを。たくさん悩ませて、心配させてしまったのだろう。

「……そっか」

古びた部屋のドアを開けたら、ただいまと 心配をかけてごめんなさい、と言おう。

父と一緒に。

「ねえ、お父さん」

「なんだい」

花澄はずっと気になっていたことを尋ねた。

「どうして……罪を償わなきゃ、父親だって名乗れないって思ったの？」

父は糸目をちよつと睜り、それから困ったように笑った。

「難しい質問だなあ」

ゆっくりと視線を前に向け、どこか遠くを見つめるように瞳を細める。

「……生まれたばかりのきみを抱いたとき、その重さに腕が震えた。とても小さくて、だけど、とても重かった。ああ、この子は生きているんだって……尊いからこそ、命はこんなに重いんだって実感した」

父は開いた両の掌を見下ろした。十三年前の感覚を確かめるように、指を曲げたり伸ばしたりする。

「そして、ふと思った。俺は、この尊い存在に恥じないだけの生き方をしてきただろうか。こんなにも重い命を背負うにふさわしい人間なのかと」

伸ばされた指が再び曲げられ、やがて拳を形作った。静かな双眸が花澄を映す。

「答えは否だった。……俺はきみのお母さんに会おうまで、本当にひどい生き方をしてきたんだよ。たくさん人を騙して傷つけてきた。そんな俺が、きみの尊さを守っていくなんて、許されないように思えたんだ」

だから、と父は続けた。

「罪を償おうと思った。真っ白な腕できみを抱きしめられるように。いつか、大きくなったきみに、胸を張って父親だと誇ってもらえるように」

それは、勝手な自己満足で けれど、確かな愛でもあった。

「だけど……結局は花澄を泣かせてしまったな」

「 いいの」

花澄はそつと父の手を握った。その顔に戸惑うような表情が滲む。指の長い大きな手。母よりもしっかりした骨の造り。掌の厚い皮膚の感触。

生まれたての自分が感じていただろうすべてを、こうしてまた感



じられることが、このうえなく嬉しかった。

「今なら、わかるから」

父の想いを、母の想いを。十三年間、絶えることなく降り注いできた光のような愛を。

「ありがとう、お父さん。……おかえりなさい」

何よりも父が待ち望んでいただろう言葉を、満面の笑顔で告げる。くしゃりと父の顔が歪む。だがそれはほんの一瞬で、すぐに見慣れた微笑みが浮かんだ。

「ただいま、花澄」

彼の目が潤んでいることに気づいて、やはり父は嘘つきだと確信した。

泣いてもいいのに。

だが花澄は何も言わず、その代わり、父とつないだ手に力をこめた。

伝わってくるぬくもりが沁みるようにあたたかかった。

## 汚泥に咲く花（前書き）

旧サイトのWeb拍手に掲載していた短編です。

## 汚泥に咲く花

「あなたはきれいな人ね」

突拍子もない褒め言葉に、男は奇妙な生きものでも見るかのような目を女に向けた。

女はにこにここと、力が抜けるほど無防備に笑っていた。まるで世界の裏側に澱む闇など知らぬような、子どもじみた笑顔。

この女はいつたいなんなのだろう。恐怖にも似た気味の悪さを覚えながら、男は皮肉な嘲笑を返した。

「さて、俺のどこを見たらそんな感想が出てくるのかね」

「だって本当にきれいなんだもの」

何がだつて、だ。

「……お嬢さん、あんたはどうしようもないほどおつむが弱いらしいな。普通、自分を騙そうとしていた詐欺師にそんなことを笑って言うやつがどこにいる」

「ここにいるわ」

さらりと答える声には、真綿のような籠の中で育てられた小鳥にはふさわしからぬ強かさが滲んでいる。見つめ返してくる瞳に濁りはなく、けれどもその奥には仄暗い深淵がじつと潜んでいた。

男は顔をしかめた。無垢な清らかさを保ちながら、人間の汚濁を知っている。そんな矛盾を、彼女は見事に成立させていた。

癪に障った。はじめてだれかを嫌いだと思った。

どんなに白のままでありたいと望んでも、自分は生きていくために黒に染まるしかなかったのに。

「あんたが俺の何を知っているっていうんだ」

これまでの自分はすべて偽りだ。優しい微笑みも、やわらかな抱擁も、甘い睦言も、何もかも演技に過ぎない。狡猾で醜い『狐』がついた嘘でしかない。

みじめだった。荒んだ感情が木枯らしのように吹き荒れて た

まらなく泣きたかった。

耐えきれずに視線を俯けた男に、それこそ優雅な白鳥のように女は首を傾げてみせた。

「だって、あなたは本当のことを言ってくれたでしょう？」

またそれだ。

追いつく間もなく飛躍してしまう女の思考に、男はとうとう根負けした。

「どういう意味だ」

「どうって……あなたは悪いことをちゃんと認めて、罪を告白してくれたでしょう。あなたは反省することができる、誠実な良心の持ち主なんだわ」

困惑しながら顔を上げると、女はまたにつこりと笑みを咲かせた。「わたしはね、たとえ法を犯していなくても人として裁かれるべき人間を知っているわ。当たり前前の顔で他人の心を踏みにじつて、そこに痛みがあることに気づきもしない。そんな罪深い、許しがたい人間をよく知っている」

でもね、と続いた言葉に、女の表情がふっと崩れた。さびしそうな、悲しそうな、しかしそのどれでもなくて。

「あなたはそうじゃない。人間にとって一番無益で、だからこそ大切なものを……忘れていなかった」

女は涙を我慢しているのではないかと、なぜか思った。

「だからあなたはきれいな。ねえ、知っている？　蓮の花はね、汚い泥のなかでこそ美しく咲くんですって」

「……俺がそうだと？」

「そう、そうよ。泥の海でもがく苦しみを知っている、雪みたいに真っ白な蓮の花」

きれいだわと熱に浮かされるように、何かから逃げるように呟いた女を、男は言葉もなく抱き寄せた。

汚泥の底で生まれ、ただそこから抜け出たくて生きてきた。どんなにみつともなくても情けなくても、生まれてきたことを後悔せ

ず、自分を誇れる人間になりたかった。

そんな慟哭のような思いが、聞こえた。

「……俺は忘れていたよ。良心なんてものは生きていくうえで邪魔でしかなくて、とつくに切り捨てた。痛みなんて感じなかった」

はじめて抱きしめる腕に力を、心をこめた。うわべだけのものではない、剥き出しだからこそつたなく荒々しい抱擁。

人のぬくもりはこんなにも熱かったのだと、ようやく思い出した。「けどあんたに会って、いつの間にか捨てたはずのものを取り戻していた。あんたに嘘を重ねるたびに、息ができないくらい苦しかった」

やわらかい髪に頬を寄せる。すぐりついてくる小さな指先が嬉しくて　これが喜び。これが、幸せ。

「あんたが羨ましかった。妬ましかった。憎たらしくて大っ嫌いで……すべてを見透かすような目をするくせに、本気で笑いかけてくるあんたが、俺は　」

濁った泥の上に咲く、清らかな白蓮の花。  
そうありたいと望み、いつしか焦がれた。

恋を、した。

ため息のような告白は増していく熱に溶けて消える。だが腕の中の細い体は、まるで最初の呼吸をする赤ん坊のように震えた。

どちらからともなく溢れた涙は、とめどなくふたりを濡らす。この身に絡みつく泥を洗い流すには足りないけれど。

「あんたは、きれいだ」

凜と咲き誇るその花の名を、男は、女は、確かに知っている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3337b/>

---

嘘つきの娘

2010年11月15日15時25分発行